2 誰もが「行動する市民」になれる 地域の魅力語り合う「釜石〇〇会議」

Point > 取組のポイント

［ヒト］
市民の「〇〇してみたい」を応援する

［着眼点］
多様な参加者を集め、魅力を語り合う

［連携・協働］
市民と行政の二人三脚

［持続性］
復興の先へ。広がる“楽しむ”空気感

Area > エリア
岩手県釜石市

Player > 取組主体
釜石〇〇会議実行委員会

Project > 取組の内容
市民参加型会議の企画・運営

Profile > 人物

左・幹事
吉野和也
よしの かずや

左から2人目・実行委員長
柏﨑未来
かしわざき みき

右から2人目・幹事
常陸奈緒子
ひたち なおこ

右・釜石市オープンシティ推進室
山口孝太郎
やまぐち こうたろう

［ヒト］

市民の「〇〇してみたい」を応援する

小・中学生や中高年、育児中の主婦、外国人など、老若男女が輪になって熱い議論を交わしている。多様な世代や立場の市民らが、交流しながら町の魅力や未来を語り合う「釜石〇〇会議」（以下、「〇〇会議」という。）の一幕だ。

「〇〇」には、参加者一人ひとりの「釜石で〇〇をしてみたい」という願いや思いを当てはめ、自ら企画し実行してほしい。そんな願いを込めている。会議では、ワークショップ形式で参加者それぞれが釜石で実現させたいことを発表し合い、それに共感した人たちでチームを結成。その後チームごとに話し合いを重ねながら、実際にプランを立てて実行に移す。個人的な願いが実際にプロジェクトとなって実現することで、楽しみながらまちづくりに関わるきっかけを生み出すことなどが目的だ。

「市民が100人規模で集まって、まちのことを語り合う場をつくろう」。2014年、当時の副市長の発案で開催された「釜石百人会議」がきっかけとなり、〇〇会議は誕生した。参加者の満足度が高かったため、単発ではなくシリーズで継続することにしたのだ。

そして、2015年に〇〇会議はスタートした。運営主体は、市と市民が共同運営する釜石〇〇会議実行委員会。現在、実行委員長を務めるのが、柏﨑未来さん（一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校・理事）だ。地元・釜石市出身で、震災後にUターン。「釜石の魅力をたくさんの人たちに知ってもらいたい」と同法人に所属し、地域で様々な活動にかかわる中で〇〇会議の運営にも加わるようになった。

老若男女が集まり、釜石で実現したいことを話し合う。

当時、すでに被災地では震災復興やまちづくりに関して様々な事業や取り組みが行われていたが、それを主導するのは地域の重鎮ら高齢世代が中心で、若者をはじめ多様な世代の市民が参画し、彼らの意見や考えが反映されるような機会は限定されがちだった。

柏﨑さんは、「まちづくりについて以前から感じていたのは、特定の人の発言権が強く、特に若い人が口を挟みづらい雰囲気があることだった。意見を言っても、認められないだろう。そんな雰囲気があることが悔しかった」という。そこで〇

チームを組み、プランを発表。その後、具体的な実行へ移していく。

「行動する市民を発掘・応援する」をコンセプトに、多様な世代や立場の市民たちがそれぞれ地域の魅力や実現させたいことを語り合う「釜石○○（まるまる）会議」。岩手県釜石市を舞台に市民と行政がタッグを組んで取り組む活動が、多くの市民にまちづくりへの主体性を芽生えさせ、地域に活気をもたらしている。

○会議では「子どもであろうが大人であろうが、男性であろうが女性であろうが関係ない。参加者全員が平等であることを大事にしている」と話す。

［着眼点］

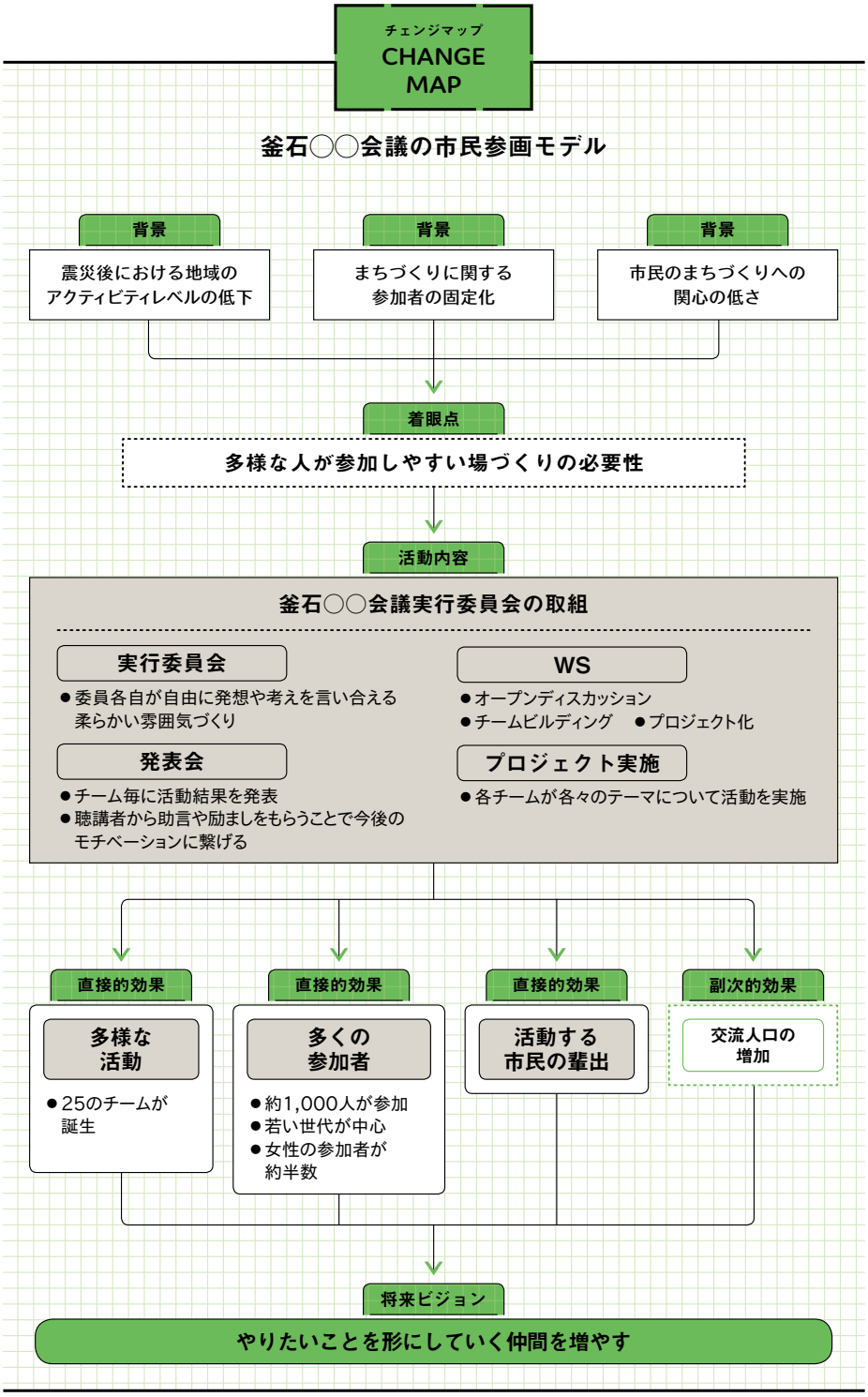
多様な参加者を集め、魅力を語り合う

「みんな同じ」、「訊く・聴く」、「受け止める・感じる」。○○会議では、こうした約束事を定めている。柏﨑さんが前述したように、多様な参加者が集まり、平等に意見を交わし、どんな声にも耳を傾ける。そうすることで、意見やアイデアを出しやすい環境をつくるように心がけている。そんな○○会議は、2017年度までの3年間に延べ930人が参加。計25のチームが生まれ、まちに活気を生み出している。

2015年3月に開催された初回には、92人が参加した。高校生10人を含む10～40代の若い世代が8割超を占め、女性も4割近くに達した。○○会議が意図した“多様な世代の交流”が実現したかたちだ。

これを含め、初年度は計4回の会議を開催し、延べ参加者は350人に到達。同じ趣味をもつ人たちがテーマ毎に集まって語り合う「コンセプトBAR with 趣味のハローワーク」や、地元に貢献できる高校生向けのボランティアを企画する「釜石さあべの会」など、9つのチームが誕生した。続く2年目も延べ300人が参加。新たに6つのチームが結成され、実際に企画が実行に移された。

商店街を活性化させたり、防災の重要性を語り合うような震災復興やまちづくりの”王道”のような企画もあれば、鬼ごっこをしながら鍋をつくる「鬼ごっこ鍋」や犬の散歩代行サービスなどユニークな活動



第3期の○○会議に参加したメンバーたち。
この一体感が活動の源泉だ。

もある。

釜石市オープンシティ推進室の山口孝太郎さんは、「参加者の満足度はかなり高い」と手応えを口にする。実際、参加者からは「自分の考えがかたちになるのはおもしろい」「一緒にやってくれる仲間ができた」「釜石の人たちともっとつながりたい」といった声が寄せられているという。

ただ、学生や女性の参加率が十分ではなく、毎年4回ほど開催していた会議に「途中からだと参加しづらい」といった意見があることもわかってきた。そのため、3年目となる2017年度は、参加へのハードルを下げる工夫を凝らした。

具体的には、これまで年間1期で完結させていたプログラムを前・後半の2期に分けて構成。1期あたりの開催数を3回に減らし、1日あたりの会議時間も短縮した。育児中の主婦をはじめ、長時間の会議に参加するのが難しい人も多いからだ。同時に、会場には毎回、子どもを預けられる無料の託児サービスや、喫茶コーナーも設けるようにした。プログラムそのものの内容も、どの回からでも参加しやすいように参加者同士の交流をメインにした構成を意識したという。

その結果、2017年度は2期合わせて280人が参加した。総数こそ以前とさほど変わらないものの、初参加の大学生が20人ほどに上ったほか、それまで3割前後だった女性の割合も4割前後に、回によっては5割近くに達するときもあったという。さらに、市在住の外国人や市外からの参加者も一定数いた。柏﨑さんは、「参加してくれる人たちの層が変わってきて、新たな可能性を感じ始めている」と笑顔で語る。

そんな柏﨑さんにとって、嬉しい出来事があった。2017年度の○○会議に参加した中学生が、「郷土の宝」をテーマに壁新聞を制作する学校の授業の一環で、○○会議のことを紹介したのだ。新聞の記事には、「釜石には何もないのではなく、知っているつもりでも見ないでいることが多い」といった記述がある。まちづくりを担う将来世代が、釜石の魅力を再発見し、行動する。○○会議が、そのきっかけになった瞬間だった。

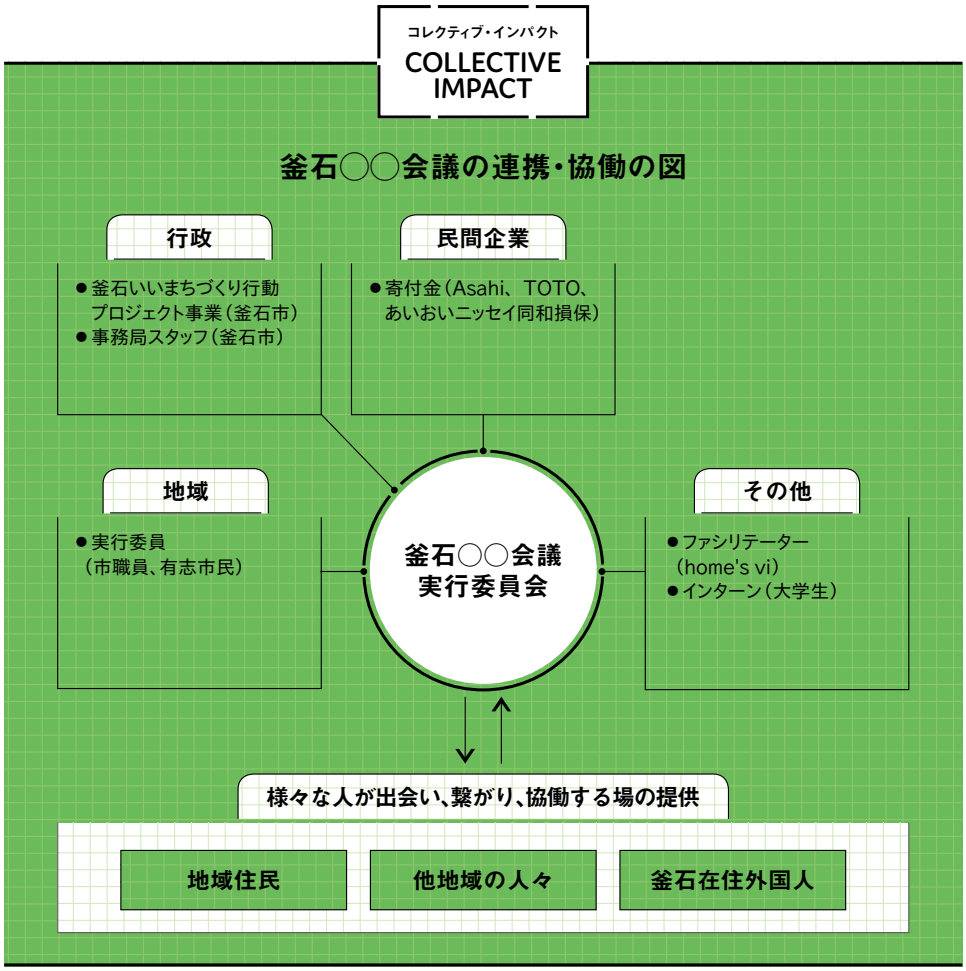
［連携・協働］

市民と行政の二人三脚

運営主体の釜石○○会議実行委員会は、柏﨑さんをはじめとするNPO職員や民間の会社員などの市民と、市職員の15人の有志で構成され、市のオープンシティ推進室が事務局を務めている。また運営費は、市の補助金で賄っており、Asahi（アサヒグループ）、TOTO株式会社、あいおいニッセイ同和損保株式会社などの民間企業からの寄付も一部活用している。このほか、会議のファシリテーションを担うNPO法人home's vi（ホームズビー、京都市）も大事なパートナーの1つだ。○○会議の発足当初から、会議の内容や進行について助言をもらい、一緒に運営している。

そんな釜石○○会議実行委員会では、会議の企画内容を変えた2017年度から運営体制にも変化が見られた。それまでの運営は経済同友会を通じて派遣されていた東京などの民間企業出身者が主に担っていたが、それを地元住民主導の運営にシフトさせたのだ。

柏﨑さんは、「復興が進むにつれて、外から復興支援に来てくれた人たちが



徐々にいなくなり、それと同時に終わってしまう活動が多かった。〇〇会議は参加者の満足度も高かったし、そういう風に終わらせたくなかった」と当時を振り返る。

柏崎さんら市民と行政が議論を交わした結果、実行委員の中から全体の企画・運営に携わる幹事のポストを3人用意し、彼らが中心となってこれまで以上に関与する仕組みに変えた。それを事務局の行政が支える、二人三脚の体制だ。幹事の1人である吉野和也さん（釜石ローカルベンチャー）は、「行政と市民が手を組み、“一緒につくっていく”という信頼関係をつくることは重要だ」とし、こうした関係性が〇〇会議の成果につながっていると指摘する。

行政側も、「例えば定例の釜石〇〇会議実行委員会では実行委員のメンバーたちが自由に発想や考えを言い合える雰囲気をつくることを大切にしてきた」（山口さん）という。実際、メンバーはその雰囲気を感じとっているようで、幹事の常陸奈緒子さん（釜石リージョナルコーディネーター）は「枠組みとしては市の事業だが、企画や運営の権限などは大部分を委ねてもらっている。自分たちで考えたことを実現しやすい環境は、達成感につながりモチベーションになっている」と話す。

［持続性］

復興の先へ。広がる“楽しむ”空気感

そんな〇〇会議は、2018年度も精力的に活動を続けている。2018年11月24日には、第1期から第4期の〇〇会議で生まれたチームの活動紹介・企画の体験会である「まるフェス」を開催。また、これまでの活動をまとめた冊子「まるっとわかる！釜石〇〇会議」を製作した。2019年1月と2月には、第5期の〇〇会議を実施した。

「まるフェス」については、釜石〇〇会議実行委員会内で以前から「〇〇会議の文化祭のような、フェスのようなことをやりたい」と話していたという。来場者に市内で活動する団体の存在を知ってもらうとともに、これまでの〇〇会議によって生まれたチーム同士の交流を促し、互いに刺激し合うことで活動をさらに活性化させるのが狙いだ。

当日は8チームの協力を得て、体験ブースの出展や活動の発表など様々な企画を実施。大いに盛り上がりを見せたといい、初参加だった県内在住の20代男性から「〇〇会議では多くの人が自分の好きなことに取り組んでいることで活気があったり、持続性が生まれているということが実感できた」といった感想が寄せられたという。

一方、第5期の1回目の〇〇会議は1月19日、「お互いを知る、まちを知る」をテーマにワークショップを実施した。また冊子は、より多くの市民に活動の意義や魅力を知ってもらえるように、〇〇会議の存在が「一目でわかる」（山口さん）ような内容に仕上げた。「発足当初は“復興”の意味合いが強く、参加者も普段からまちづくりに関わる人が多く、チームも地域課題解決型の活動が目立った。ただ、特に昨年度からは復興・まちづくりの文脈はありつつも、純粋に“釜石を楽しもう”という空気感に変化してきている」。こう話すのは、前出した常陸さんだ。復興の先へ――。多様な人々の新たな一歩を応援し、行動する市民を輩出してきた〇〇会議。その挑戦は、これからも続く。

上・釜石〇〇会議実行委員会の様子。定期的に開催し、メンバー間で情報を共有している。
下・初年度は9つのチームが誕生し、実際にプランが実行された。

本事例の問い合わせ先

釜石〇〇（まるまる）会議実行委員会

所在地 > 〒026-8686　岩手県釜石市只越町3丁目9番13号（釜石市オープンシティ推進室内）

TEL > 0193-22-2111

HP > https://www.facebook.com/marumarukaigi/

主な事業内容 > 市民参加型会議「釜石〇〇会議」の企画・運営